



現代中国

を知るための

章

高井潔司 (編著)

明石書店



〈編著者略歴〉

高井 潔司

北海道大学大学院国際広報メディア研究科教授。1948年生まれ。東京外国語大学中国語科卒。読売新聞社上海特派員、北京支局長などを経て、99年北海道大学言語文化部教授。2000年4月より現職。

主な著書に『21世紀中国の読み方』（蒼蒼社）、『中国情報の読み方』（蒼蒼社）、『甦る自由都市上海』（読売新聞社）など。

エリア・スタディーズ

現代中国を知るための55章

(定価はカバーに表
示してあります)

2000年7月25日 初版第1刷発行

編著者 高井 潔 司

発行者 石 井 昭 男

発行所 株式会社 明石書店

〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11

電 話 03 (5818) 1171

F A X 03 (5818) 1174

振 替 00100-7-24505

<http://www.akashi.co.jp>

組版・印刷所 美研プリンティング(株)

製 本 所 (株)難 波 製 本

ISBN4-7503-1316-5



現代中国

知るための

章

高井潔司 編著

明石書店



まえがき

二一世紀、中国がどのような道を歩むのか、世界的に注目されている。

それは中国が一九七八年末、国家の建設目標を社会主義革命から経済建設に移し、改革・開放路線を導入して、孤立的な地位を脱し、二一世紀に、経済的にも、大国の地位を狙えるだけの基礎を作り上げてきたからだといえよう。ソ連崩壊によってアメリカ合衆国の一極支配が続く中、二一世紀には、米中間の「新冷戦時代」を予想する向きさえある。

しかし、その一方で、先送りされてきた国有企業改革や金融体制改革の前途が不明である上、世界貿易機関（WTO）の加盟に向けて、中国はいっそうの国内市場の開放や経済法規の整備などに迫られている。東西格差の拡大や環境破壊など改革・開放路線が積み残した課題も多い。その解決如何によって、今後の経済のみならず中国の前途は大きく左右される。

また経済発展に伴って社会の多元化、流動化が進んでいるにもかかわらず、共産党の一党独裁体制維持が大きなネックとなって政治体制改革が大幅に遅れている。その結果、党幹部も加わった組織的な不正・腐敗事件が跡を絶たず、党に対する信頼感は著しく低下している。だが、政治体制改革のテンポを早めれば、かえって党の指導力が弱体化する恐れもあり、党にとって、政治改革は大きなジレンマとなっている。

そうした経済、政治の不透明感が対外関係にも陰を落としており、対米、対日関係を中心に、改善―冷却の大きな変動のサイクルを描き続けている。

一方、二〇世紀末に、香港、マカオが返還され、中国としては残る台湾を統一して、一九世紀半ばからの悲願である「中華の統一」の実現を目指したいところだが、台湾では独立の声がいつそう高まり、今後中国と台湾の対立はアメリカや日本を巻き込んで、複雑な展開が予想される。

本書では、そうした大国化の反面、不透明感が拭い切れない中国について、政治、経済、社会、外交など様々な断面から分析することによって、二一世紀の中国の動向を知るカギの提供を目指した。執筆者はいずれも中国、あるいは香港に駐在し、現地で中国の動向を取材し、調査してきた研究者、記者である。執筆者はそれぞれ異なった二一世紀の中国観を持っているが、自身の中国観を展開するよりも、各種のデータや資料、情報を示して、中国の今後の動向を見る視点の提供に努めた。

以下、私個人の本書の読み方について少し触れたい。中国の将来像を描く上で、本書のように、個々の問題を分析してみることは、もちろん重要であり、基本的なアプローチだ。しかし、それ以上に大事なことは、総体として中国の動向を、「長期的」な視点で、「主体的」に、見ていくことだ。個々の問題に捉らわれて、中国像を描くと、「中国悲観論」や「中国崩壊論」に直結してしまう。少し過去にさかのぼって、「長期的」にみれば、確実に中国の経済体制や社会は後戻りできないほどの変革を遂げてきたことがわかる。停滞しているという政治体制改革でさえ、それなりに動いてきている。経済とのバランスが取れていないことが問題なのだ。

本書で指摘した諸問題について、実は、中国当局も十分認識し、その解決にあたらうとしている。

日本は中国の隣りに位置し、中国と、外交的にも、経済的にも緊密な関係を結んでいる。他人事のように、その崩壊を予測するような立場にもはやない。決して「樂觀論」を説いているわけではない。中国問題が、実は日本の問題でもあるという「主体的」な姿勢で、中国の動向を見守っていくべきだと私は考えている。

本書の企画は、中国近現代史の小島晋治・東京大学名誉教授が、新聞記者など現場の経験の豊富な人にと、執筆の機会を私たちに回してくれたと聞く。その期待に応えられたかどうかはともかく、貴重な機会を与えてくれた小島先生と明石書店の石井昭男社長に感謝したい。

二〇〇〇年四月

高井 潔司

現代中国を知るための55章



I

迫り来るグローバル化の波 13

- 第1章 20世紀の総括と21世紀の展望——大国化の道を目指す／14
- 第2章 グローバリゼーションとナショナリズム——20世紀の残したシレンマ／18
- 第3章 共産党の指導体制——間接支配は貫かれるか／22
- 第4章 政治体制改革の行方——ソフトランディングのカギ／25
- 第5章 機構改革——市場経済化の総仕上げ／29
- 第6章 江沢民体制はどうなるか——乗り越えられない鄧小平の旗／32
- 第7章 第四世代指導者の群像——すでに中央で活躍中／35
- 第8章 天安門事件の再評価——進む風化／38
- 第9章 人権問題——避けては通れない課題／41
- 第10章 少数民族問題——経済が力ぎ握る融和／44
- 第11章 軍の発言力と党の指導——進まない国軍化／48
- 第12章 中国の軍事力と脅威——特異な安全保障観／51

II

正念場の改革・開放路線

65

第13章 人口爆発——危機はらむ急速な高齢化／55

第14章 環境問題への取り組み——公害のデパート／59

第15章 食糧生産——捨てきれぬ食糧難の可能性／62

第16章 長期的な経済発展見通し——見かけの高成長から筋肉質の中成長へ／66

第17章 財政再建——経済改革の最終段階まで残る課題／70

第18章 国有企業改革——「選択と集中」による安楽死工程／73

第19章 金融改革——成否の力ギを握るのは国有企業改革／76

第20章 内需拡大——起爆剤は農村部の「離陸」／79

第21章 地域間格差と内陸開発——「先に豊かに」から「共に豊かに」／82

第22章 対外貿易——WTO加盟で大変貌する中国の対外貿易関係／85

第23章 外資導入——WTO加盟で国内企業の淘汰が進む／88

第24章 失業問題と社会保障——社会のセーフティネットとなりうるか／91

第25章 個人・私営企業の成長——期待される余剰労働力吸収の役割／94

第26章 農村の活性化——経済的にも政治的にも重要だが前途は多難／97

✓

- 第27章 エネルギー確保——省エネと効率利用図る／100
- 第28章 日中経済の将来——率直かつ建設的な対話が必要／103
- 第29章 科学技術と教育の振興——「科教興国」戦略／106
- 第30章 人民元と資本市場——慎重に進めるべき資本市場開放／109
- 第31章 上海と浦東開発——グローバルゼーションの接点に／112

Ⅲ

多元化、流動化する社会

115

- 第32章 変わるライフスタイル——セーフティネットを求めて／116
- 第33章 住宅改革——経済を引っ張り社会を変えるか／119
- 第34章 電脳社会——情報閉鎖を打ち破るか／122
- 第35章 学生生活の変化——姿消す民主化の前衛／126
- 第36章 帰国する留学生——先端技術取り入れの担い手／129
- 第37章 一人っ子政策の将来——誤れば社会主義揺るがす／132
- 第38章 法輪功の底流——ネット利用で体制揺さぶる／136
- 第39章 社会治安——国民の不安高める風紀の乱れ／139
- 第40章 幹部の不正・腐敗——独裁体制下のイタチごっこ／142

IV

多極化期す独立自主外交

155

第41章 権力犯罪としての密輸事件——経済発展にも影響／145

第42章 報道改革の行方——期待される社会監督機能／148

第43章 貧困地区の解消——党の存続をかけて／151

V

「二国二制度」の行方

175

- 第44章 外交戦略——目指す大国外交／156
- 第45章 米中関係——いつまで続く安定した状態／159
- 第46章 日中関係——期待できない大幅改善／162
- 第47章 中ロ（ソ）関係——対米冷え込みで再び連携強化／165
- 第48章 対朝鮮半島との関係——北の孤立を懸念／168
- 第49章 対東南アジア諸国連合外交——結び付き強化でアメリカ牽制へ／172

第50章 中台関係の行方——当面、一進一退続く／176

第51章 台湾総統選挙——決定的な台湾化／179

第52章 台湾の実務外交——厳しい周辺環境／183

第53章 香港自治の保障——台湾統一のシヨーケース／186

第54章 経済センターの行方——揺らぐ中国のマンハッタン／189

第55章 マカオ返還——黒社会制圧が使命／192

迫り来るグローバル化の波

1

20世紀の総括と21世紀の展望

★大国化の道を目指す★

中国にとって二〇世紀は、文字通り「激動の世紀」であった。孫文率いる辛亥革命によって、清王朝を倒し、三〇〇〇年の王朝支配に終止符を打った。だが、孫文が革命の道半ばで死去すると、軍閥割拠の混沌が続く。その間隙を縫い、欧米列強に続いて日本も侵略を仕掛けた。

抗日戦争さらには国民党との内戦の末、一九四九年毛沢東がようやく新中国を誕生させたが、休む間もなく社会主義建設に走り出し、性急な大躍進運動が犠牲者数千万人とも言われる大災害をもたらした。その教訓も空しく、一〇年の文化大革命が再び全土を混乱に陥れた。

毛の死後、三度目の劇的な復活を果たした鄧小平が、改革・開放路線へと中国を転換させ、市場経済と対外開放が中国経済を大きく飛躍させた。だが、国際的な枠組みに組み込まれた政治や経済は、共産党一党支配にも転換を迫っている。資本と労働の大量投入によって達成した高度成長にも陰りが見え始めた。「二一世紀の大国」を目指す中国の今後の道程は決して平坦とはいえない。

世紀末に至って、中国は、ようやく香港返還に続き、一九九

九年マカオ（澳門）の返還を実現した。台湾の統一を別として、マカオの返還によって列強侵略の傷痕は中国から姿を消した。マカオの宗主国・ポルトガルは、清朝に居留が認められた年から数えて、四五〇年になる二〇〇七年の返還を希望したが、中国は二〇〇〇年前の返還を強く望んだ。二〇世紀のうちに列強に侵略された屈辱の歴史に、決着をつけたという中国の強い決意を感じさせる。

しかし、中国が二〇世紀になし得たことは何だったのか。国外からの侵略と国内の混乱をかううじて収め、国際社会にその存在を認めさせる国家を建設した程度だったという皮肉な見方もできよう。それは共産党が今もって掲げる「社会主義」の理想とは、遠く離れたものだ。急速に求心力を失いつつある共産党が、世紀末に、「愛国主義」を強調する点にもその弱点が現れている。

アヘン戦争の敗北以来、欧米、日本などの列強によって、半植民地という屈辱的な立場に陥れられた中華文明の子孫たちは、主権と失地回復に、あまりにも自意識、被害者意識過剰だったのではないだろうか。裏返せば「愛国主義」ともいえようが、その結果、あまりにも振幅の激しい路線を歩み、相次ぐ「運動」に壮大なエネルギーを費やした。

一九五〇年代前半はアメリカの共産圏封じ込めに対抗するため、漸進的な新民主主義路線を放棄して、ソ連一辺倒の計画経済へ。五〇年代半ばにはスターリン批判をめぐるソ連指導部との論争で社会主義陣営を真つ二つにする対立へ。その結果、社会主義の総本山は中国とばかりに成果をあげた。工業の基礎も無ければ、教育もままならない現実を無視して、イギリス、アメリカに追いつき追い越せと、大躍進運動へと突き進んだ。文化大革命はその混乱のきわみであった。毛沢東の死で、ようやく運動にブレーキはかかった。実用主義者、鄧小平はすべてを現実置き、国家の再建にあたった。